

二次元ドリームノベルズ

羽沢向一

挿絵/らら8

異世界テレビで陵辱ゲーム生中継

女捜査官マナ

FEMALE INVESTIGATOR MANA

試し読み版

18
未 満

プロフィール スカウト

第一章 エロエロ異世界美女ゲーム大会 処女略奪椅子取り

024

第二章 エロエロ異世界美女ゲーム大会 正解はアナル

069

第三章 エロエロ異世界美女ゲーム大会 濡れ透け水着合戦

092

第四章 エロエロ異世界美女ゲーム大会 お客様の精子をください

116

第五章 地獄のサバイバル大脱走ゲーム 再挑戦開始!

143

第六章 地獄のサバイバル大脱走ゲーム チャンピオン軍団と尻壁女捜査官

161

第七章 地獄のサバイバル大脱走ゲーム ダブル陵辱パトカー

217

第八章 地獄のサバイバル大脱走ゲーム 二人の女捜査官の媚肉宴

247

エピソード リポート

300

登場人物紹介

Characters



みつもり まな
光森 茉奈

連続強姦殺人犯を追う警視庁捜査一課の女刑事。犯人に陵辱されそうになるも異世界に飛ばされてしまい、異世界テレビ局のゲームに参加することになる。



しんどう あきこ
新藤 亜希子

異世界日本の女警視。異世界テレビ局のゲームに参加し、同胞を護るという使命を果たそうとする。

かぎざきこうじ
鍵崎 浩司

逃亡中の連続強姦殺人犯。茉奈とともに異世界に飛ばされてしまうのだが…。

ミスター・ラッキーが満面の笑みで告げる。

「イクと言い忘れてますよ！」

「……」

茉奈は答えられなかった。

『イク』という言葉は知っている。学生時代の女の友人の中には、平気でおしゃべりで『イク』と口にする者もいた。しかし茉奈はとても卑猥な気がして、ひとりのときにも口に出すことがはばかられた。

「プレイヤーは絶頂したときにイクと言わないと、ゲームクリアとは認められませんよ！ルールで決まっています！」

「……そ、そんな勝手なルール、今作ったのね」

「この番組の第一回からの伝統のルールですよ！　そうですよねえ、観覧席のお客さん！」

「そうだ！」

「その通り！」

「イクと言え！」

と、大歓声が観覧席に並ぶ男たちから返ってくる。『イクと言え！』と連呼する男たち

の馬鹿騒ぎに、茉奈の胸の内に憎悪と嫌悪がこみ上げた。

(下劣すぎる。この世界の男たちは、みんなこうなの!!)

「お客さんのご要望に従って、さっそく茉奈選手にイクと言ってもらいましょう！」

透明なショーツの内側で、触手の舌が二度目の変形を見せた。舌が細く尖って、先端に小さな唇のような穴が開いた。

触手の唇がキスをするようにクリトリスに吸いつく。

「ひゃうっ！」

媚薬まみれの絶頂を迎えて、最大限にしこり勃つ肉の粒が、すっぽりと細い触手の中に包みこまれる。

陰核にぴっちりとは触手の内側の肉粘膜が貼りつき、強く吸引された。

「ひっ！ あっひいいいいいッッ！」

小さな肉の真珠を根こそぎ引っこ抜かれるような衝撃が、クリトリスから股間に走り、脊髓を貫通して、脳をハンマーで殴られたように直撃した。

「あっおっおっおっおっおううう！」

人間の手や口では不可能な異常異形の快感が、茉奈を一気に官能の高みに吹き飛ばす。ミスター・ラッキーの声と金ぴかマイクが、茉奈に突きつけられる。

「さあさあ！ 茉奈選手はイクと言ってください！ イクと言うんです、茉奈選手！ イクですよ！」

肉体の小さな一点から吹き荒れる快悦の暴風に翻弄ほんろうされる茉奈の脳に、司会者の言葉が催眠術のように染みこんでくる。

「イクと言わないと、茉奈選手も、同じ日本のチームメイトたちも、故郷へ帰れませんよ！」

「あつ、あああああ」

「言いながらイツちゃつてくださあい！」

とどめの言葉で一撃されて、茉奈は禁断の単語を口からあふれさせた。

「イクッ！」

「茉奈選手が言いましたあ！ ラッキーッ！」

観客も大きくどよめき、唱和する。

「ラッキ————ッ！」

口から出した言葉に引っぱられて、クリトリスの快楽が上へ上へと積み重なっていく。一度崩壊したダムから膨大な水が流出するように、茉奈は屈服の言葉を吐きつつける。

「イクうッ！ イクイクイクうううう————ッッ!!」

チュポッ！

かわいく淫らな音を立てて、女芯から触手の唇が剥がれた。その動きが最後の責めになり、再び膣口から女蜜が噴出する。

「イックううっ！ はおおおおおおううううッッ!!」

また茉奈の首が、ガクンと前に倒れた。

「はあっ、はあ、あふっ、ふうう、はあああ……」

全身をふるふるとわななかせて、熱い呼吸を連続させる。

「さあさあ！ いよいよ第一ゲームのクライマックス！ 茉奈選手に処女を卒業してもらいましよう！」

ミスター・ラッキーの煽りに、までもや観客が歓声と拍手で盛り上がった。

「ついに来たあっ！」

「待ってたぞ！」

「公開おまんこ卒業式だ！」

茉奈は顔を上げて、潤んだ瞳でミスター・ラッキーをにらみつける。

「わたしが処女だと、どうして」

「事前に徹底した調査をしているんですよ！ 伝統ある『エロエロ異世界美女ゲーム大会』は、参加プレイヤーの半数以上を処女にするのが厳正なルールですからね！ 処女を確認

するのはコンプライアンスです！　ここにいる六人のプレイヤーも半数が処女ですよ！
ねっ！　処女の人は返事してくださいーい！」

異世界の五人の女たちが美貌をそむけ、うつむかせる。カメラが追いかけて、朱に染まった顔を逃さずに撮影した。

「では全国一億人のテレビの前の皆様に、茉奈選手が触手に処女をプレゼントするあてずがた艶姿ご覧に入れましょう！　まさにラッキー！」

ショーツの中でクリトリスを食った触手が、下着の外に出た。三度形を変えて、瘤が連なる武骨でヌルヌルした元の触手に戻る。

再び触手が、茉奈の股間に迫ってくる。先端の瘤が右側のレッグホールにヌチャッと触れた。

茉奈の全身がビクンッと震えて、今まで保っていた意地を失い、処女の悲鳴をほとばしらせた。

「嫌っ！　こんな形で処女を失うなんて、絶対にいやあつ！」

瘤が蠢き、見た目からは想像つかない器用さで、ショーツを左へずらした。透明になった布がなくなり、カメラの前で女性器が完全に露出する。

茉奈の肉花は二度の絶頂を極めて、鮮やかなピンクに色づき、媚薬粘液と自身の愛液に

濡れそぼってキラキラと輝いた。

肉襷はさらに充血して、ぼつてりと厚みを増している。触手に吸われてイカされたクリトリスは、痛々しいほどに赤く染まり、今にも破裂しそうに腫れあがった。

「嫌ああ、あううっ！」

ズブツ！

人間的な遠慮も容赦もなく、膣口が赤い瘤触手に強引に押し広げられる。

「はううう！ 痛いっ！」

ズビュツ！ ズジュ！ ズリュウ！

人間のペニスとは異なる形状の瘤の連なりが、次々と膣の中に入りこみ、女体の奥へと進撃していく生々しい光景が、日本中に放送される。

「ひいいいっ！ 痛いいいいっ！」

媚薬に冒された女性器だが、破瓜の苦痛はなくならなかった。ましてや女体が本来受け入れるモノとは異なる怪物が、無理やりに潜りこんでくる。

「痛いっ！」

茉奈の苦鳴に、五つの叫びが重なった。他の五人もいっせいに瘤触手を突き入れられた。六人全員が身体をのけぞらせ、縛られた手足を震わせて、激痛を訴える姿も撮影される。

婦人警官が銀色の長い髪を振り乱して叫ぶ。

「ひきいいいっ！ 痛いっ！」

真紅の瞳から涙を流して、チアリーダーが両手の十本の指を反り返らせて大きくわめく。

「いっ、痛いの！ うああああっ！」

ファストフードの店員が、頭上の光る輪をクルクルと回転させて、甲^{かんだか}高く絶叫した。

「あぎいっ！ 痛あああい！」

触手の瘤に押し広げられた茉奈の膣口から、鮮血が流出した。赤い触手と椅子が、色合いの違う赤に塗られる。

テレビカメラの前で、六人のうちの四人が一生に一度の血を流した。

茉奈の血まみれの股間に、ミスター・ラッキーが顔を寄せて、いっしょにカメラに入っ
た。

「出たあ！ 血が出ましたよ！ 日本中の皆さん、見ましたか！ 四人が処女だと証明されていきます！ しかし非処女までこうも痛がるとは、椅子の設計に少しばかり失敗したようです！」

大きな赤い花が開花するように、床に四人分の血が丸く広がる。

茉奈の膣の奥まで入りこんだ触手の瘤のひとつひとつから、いっせいに粘液が分泌され

た。たちまち膣の中が粘液で充満して、血液に混じって膣口からあふれ出た。

「あつ、なに!? はああああ!」

触手が出す粘液はあたりまえのように強烈な媚薬。処女強奪の激痛が一瞬で、猛烈な快感へとすり替わる。

異物を強引にねじこまれる痛み悲鳴をあげていた柔肉が、甘美な餌を与えられたペットのようについに触手に吸いついている。

（嫌だ! 怪物に犯されて気持ちよくなるなんていやっ! 痛いほうがましよっ!）

怪物に初体験だけでなく、破瓜の痛みすら奪われたのが、悔しくてたまらない。人間ですらないものに強姦されて、気持ちよくなっているのが、あまりに忌まわしい。

（嫌だ! いやっ! いやいやいやいやああっ!）

頭の中で否定しても、身体の奥から女肉の喜悦が湧き出してくる。気がつくとき、自分の声が苦痛のうめきから、濡れた喘ぎへ音色を変えていた。

「くうう……あああ……うんっ、んんあっ!」

触手は膣内に収まったまま動いていないのに、喘ぎ声の後から後から喉をせり上がった。「はあああ、いや、いやだああうんん、ふわあ、あおっ!」

喘ぎ声の音階が一気にね上がる。今まで膣の中でじつとしていた触手が、回転をはじめ

めた。

「おっひいいいっ！」

グチュルルル！

茉奈の体内に粘つく音を響かせて、触手が右に回転した。連結する大小の瘤が膣肉を引っかけてよじらせる。人間の男のペニスを知らない女体が、人外の快感を刻みこまれた。

「はひいいいっ！ ダメッ！ あっおおううっ！ ダメえええっ！」

ニチャルウウ！ ヌチイイイッ！

触手の回転方向が反転して、左へまわった。膣粘膜が逆にねじれて、茉奈は新たな刺激に襲われ、愉悦の電撃が飛び散る。

「ひいいいっ！ もう、もうおかしくなるううっ！ おおおうっ！」

四肢を拘束された茉奈の全身がガクガクと躍り狂い、ダークブルーのスーツで二つの乳房がはねまわる。

尻肉が激しく椅子にこすりつけられて、キュツキュツキュツと摩擦音をかき鳴らした。

連続して二度の絶頂を極めて、女肉の内外を媚薬漬けにされた茉奈は、早くも三度目の限界に達しようとする。

（あああ、来る！ また来る！ 触手に処女を奪われて、果てさせられる！）



「いやあっ！」

叫ぶと同時に、膺壁が勝手にひとときわ強く触手の瘤を締めつけた。

目の前でカメラが自分の顔を撮影しているのはわかりきっている。わかっているにもかかわらず肉体の暴走を止められない。肉体の歓喜の極まる言葉が、口から飛び出すのを防げない。

「もうイクうつ！ ふああおおううつ！ イッチャううつツツ!!」

茉奈とタイミングを合わせるように、別々の日本の女たちも性感の頂点に到達した。円を描いて座る六つの女体がわななき、エクスタシーを訴える。

「あああ、イクツ！」

「イッチャううつ！」

「ひいい、イク！」

「イクイクイクツ！」

「イクのほおお!!」

「もうイク！ イクふう！」

六人の美しいイキ顔を、余すところなくカメラが撮影して、日本全国のテレビへ送り出した。

「スーパラッキー！ 全国の皆さん、ご覧になりましたか！ 六人のプレイヤー全員が

イキましたよ！ さあさあ！ もっとイッて視聴者にサービスしてください！」

ミスター・ラッキーの明るい声に合わせて、六本の触手が前後に動き、六つの女性器をえぐった。六人の美女たちはたちまち新たな肉悦の暴風に巻きこまれて、よがり声を合唱する。

「あひいいいい！」

「ダメへえええ！」

「狂っちゃうう！」

「はっおおうう！」

「はううっんん！」

「ほあああ——！」

瘤だらけの触手がくねりながら前後にピストン運動をつづけ、茉奈たちを次の絶頂へと追いたてていく。

六人ともさらなる高みへ舞い上がり、今度も真っ先に茉奈が叫ぶ。

「またイクッ！ イクのが止まらないいいっ！ はっあああああ!!」

わずかに遅れて五人の叫びが次々と後を追った。

「イクふううう!!」

「もつとイッちゃうっ!!」

「おほおおう! イク!!」

「イックくん!! はひい!」

「ふっわあああッッ!!」

美女たちのイキ声が飛び交う中で、ミスター・ラッキーが爽やかに告げた。

「絶頂はつづいてますが、第二ゲームの準備のためにしばらく休憩です! その間はおなじみ通販のカリスマ、ハッピー安長の『ズバリ特得シヨッピング』ををご覧ください! チャンネルはそのままだとラッキー!」

フロアディレクターがカットを叫んだ。

茉奈たちの手足を縛る触手がほどけて、女性器からも触手が抜けた。

六人全員が椅子から滑り落ちて、自身の血液と愛液で濡れる床に転がる。

女たちに大勢のADが群がり、荷物を運ぶようにスタジオの外へ連れて行つた。

第二章 エロエロ異世界美女ゲーム大会 正解はアナル

茉奈はひとりひとりにあてがわれた個室の中で、汚れた衣服を脱がされ、シャワーで身体を洗われ、髪を整えられ、メイクされて、同じ服を着せられた。

茉奈はまたダークブルーのスーツの白いシャツ。黒いローヒール。

そして太腿が丸出しのマイクロミニスカート。

第一ゲームの衣装とまったく同じデザインだが、すべてきれいにクリーニングしてある新調のもの。

茉奈も勤務中によく食べるゼリー状の健康食品に似たバナナ味のものを強引に口に押しこまれて、しばらく休むと、驚くほど疲労がきれいに消えた。意識もすつきりする。

(ヤバイ成分が入ってるんじゃないの)
と、心配になるほどだ。

身体は元気になっても、股間の違和感は消えない。なにより今も身体が熱をはらみ、下半身のチリチリする疼きがつづいている。

(ああ、まだ媚薬の効果が残ってる)

と、はつきりわかった。

A Dの群れにうながされてスタジオへ向かって歩くと、処女を失ったばかりの女肉がこすれて、ピリッと甘い痺れが走る。足を前へ出すだけで、口から喘ぎが洩れてしまう。

「あんっ……んう……はあっ……」

刺激を少なくするためにそろそろと足を運び、自分と同じくきれいになった五人と合流してスタジオに戻ると、セツトが一変していた。

円形に並んだ椅子がなくなり、床は清掃されてピカピカ。

中央には、有名な猫型ロボットのおなじみの道具っぽいドアが二つ、横に並んで立っていた。ドアの一方はきれいな赤色で、白で大きな『○』が描いてある。もう一方は鮮やかな青色で、白い『×』。

ひと目見て、茉奈はピンと来た。

（芸人ナントカクイズで見た。二つのドアの向こうに、水とか小麦粉とかペンキがあるやつよね）

ミスター・ラッキーが茉奈たちへ向けて左手を伸ばす。

「第二ゲームは『クイズ正解に飛びこめ』です！」

（ああ、やっぱりそうだ）

「六人のエロエロな挑戦者に拍手！」

多数のカメラが茉奈たちに向けられ、観客の拍手が沸き起こる。

「ゲームのルールは単純明快！ わたくしが読む極めて常識的な文章が正しいと思えば、○のドアに飛びこんでください！ 間違っているなら×に飛びこみます！ 正解のドアに飛びこんだプレイヤーには、ラッキーなご褒美があります！」

茉奈は司会者の笑顔をにらんだ。

（また正解のほうに、ろくでもないものがあるのかもしれない）

「では最初のクイズの解答者は光森茉奈選手！」

「いきなりわたしから！」

他の五人と観客たちの視線が、茉奈に集中した。多数のカメラも、焦点を合わせる。

いくつものアングルから放送される茉奈の驚きをよそに、ミスター・ラッキーが問題を読みはじめた。

「問題です！ 今の日本の大統領は山尾有造やまおゆうぞうですが……」

「えっ、大統領!? 日本の!?!」

「二代前の日本大統領は米川三郎よねかわさぶろうである！ ○か×か？ これは子供でもわかるラッキー問題です！ 二代前の大統領は、我が国の歴史に残る大スキャンダルを起こした人ですか

らねえ！」

茉奈は顔を怒りの色に染めて怒鳴った。

「別世界の日本のことなんか、わかるかあつ！」

他のプレイヤー全員がうなづく。

司会者は平気な顔でにこやかに笑った。

「おやおや！ 茉奈選手はご存じない！ それでは刑事の勘でドアに飛びこむしかないです
ね！ 茉奈選手、解答をどうぞっ！」

プレッシャーを与えるスリリングな音楽がスタジオに響いた。困惑する茉奈の顔をカメラがアップにする。

（意味不明の二択だもの。どちらを選んでも同じ……）

しかし自分の選択で、楽屋にいる同じ日本の女子たちの運命が変わると考えると、軽々しく決断できない。なにかヒントはないかと右と左、赤と青、○と×のドアを目で探るが、椅子同様になにもわからなかった。

ミスター・ラッキーが左手を顔の前に持ってきて、存在しない腕時計を見るまねをした。「茉奈選手、迷っています、持ち時間を過ぎると失格ですよ！ おーっと、あと十秒で失格かも！」

「決めた！」

茉奈は床を蹴った。まっしぐらに青い×のドアへ走る。性格の悪いこの番組のスタッフなら、最初の問題に×を選ぶと思ったただけだった。

「うやあっ！」

柔道のかげ声を発して、青いドアに向かってジャンプする。前腕を顔の前で交差させた。元の日本のバラエティ番組なら、ドアは発泡スチロール製で、体当たりであっさりとき破れる。

この日本は違った。青いドアが自動的に向こう側へ開き、茉奈の身体はドア枠をくぐり抜ける。

「あ！」

透明な水面が目に入った。

ドア枠の向こうには四角い窪みがあり、小型のプールのように透明な水をたたえている。プールとしては小さいが、どう見ても青いドアの背後に隠しようがない面積だ。

ビチャン！

ねっとりした音を立てて、茉奈は四つん這いの体勢でプールの中に落ちた。プールは浅く、底に着いた膝の上までの深さしかない。

底に着けた両手と両脚にまとわりつく触感に、茉奈は驚愕した。きょうがく

(水じゃない！)

透明な液体に見えたものは、粘度の高いどろどろした物質だ。

(透明なスライム？)

茉奈の頭にあるスライムは、おもちゃのスライムだ。ゲームやアニメにはまらなかった茉奈にとって、スライムはモンスターではなく、ベトベトした子供の遊び道具にすぎない。スライムのプールに四つん這いになってあたりを見まわすと、間違いなくスタジオの中だ。プールサイドにはミスター・ラッキーが立ち、観覧席にはさつきと同じ観客が整列している。

背後に首を曲げると、自分が情けなく、あられもない格好をしているとわかった。

四つん這いの姿勢のために、マイクロミニスカートの裾が尻の上にまでずれて、またもや白いショーツを穿いた尻を完全に露出している。

いつの間にか左右のプールサイドにカメラマンが立ち、さらにはスライムの中にまでカメラマンが入ってきて、茉奈の尻や太腿を熱心に撮影した。

自分の恥ずかしい尻の向こうには、青と赤のドアが二つ並ぶ。

やはりプールは二つのドアの横幅より大きく、外側まではみ出していた。

（どうして、ドアの向こうからプールが見えなかったの？ これもこの日本のとんでもない技術？ スライムに落ちて正解なの？ 失格なの？）

ともかく茉奈はプールの外へ出るために、スライムの中から立ち上がろうとした。

「えっ！」

左右の手首から先と、両脚の膝から下がスライムに捕らわれて、抜くことができない。肌に密着する感触は柔らかいままなのに、手足の力で形を崩せない。弾力のある強固なゴムの中に四肢を突っこんだようだ。

手足を自由にするために力を入れると、反動で身体が動き、後ろにあるカメラに向かって尻をプリプリと振ることになる。

「どうなってるの!？」

「茉奈選手、正解です！ お見事です！ ラッキー！」

キンコンカンコン！ と、どこかで聞いたことがあるような音色が、スタジオに鳴り響く。

「正解した茉奈さんには、褒美にスライムのお楽しみをプレゼントします！」

「なに!! ああっ！」

茉奈の前のプールサイドに、ADがモニターを移動させた。画面に茉奈の尻を突き出し

た四つん這いの後ろ姿が映る。これが今、全国のテレビに放送されている映像なのは間違いない。

茉奈が見つめる映像の中で、スライムに沈む左右のふくらはぎの間の水面が、同心円状に波打ちはじめた。

そして円の中心が、プルン、と盛り上がる。

水滴が落ちる様子を上下逆さまにしたように、スライムが中心から上へ伸びていく。粘度が強いとはいえ今にも崩れ落ちそうに見えるスライムの柱は、重力に逆らって高さを増していく。

スライムが伸びる先にあるものは、ショーツの純白の布に包まれた茉奈の股間と尻の間。スライムの先端がショーツの布をつかみ、明確な意思があるように右側へずらした。

「あああつ！」

茉奈の前のモニターに、ショーツが隠していたものが現れる。

再びさらけ出された女の秘部は、媚薬の残滓ざんしによって、恥丘全体が薄いピンクに色づき、普段よりも盛り上がって見えた。

肉唇もわずかに開いて、内側の艶めかしいぬめりをうかがわせる。

触手椅子に腰かけていたときにはカメラに撮られなかった肛門が、今回は余すところな

く公開された。

茉奈本人ですら、自身の肛門をまともに見るのは生まれてはじめて。恥ずかしくて目をそらしたいのに、まじまじと凝視してしまう。

自分の肉体の秘密に見入っていると、ミスター・ラッキーの遠慮知らずの声が鼓膜を叩いた。

「茉奈選手の肛門はなんとという愛らしさでしょうか！」

（言うな！ お尻の穴を褒められても、うれしくない！）

茉奈の怒りを無視して、司会者の描写がさらに具体的になる。

「掲げた尻の谷間の奥で、さながら可憐な花がひっそり咲いている風情です！」

ミスター・ラッキーの解説に合わせて、映像が尻全体から肛門にフォーカスする。画面全体に肛門が拡大された。

「繊細で精緻な皺が放射状に広がり、中心はキュッとすぼまっている様子は、犯罪者相手に日夜闘う勇敢な女刑事の肛門とは思えない愛らしさを醸し出しています！ かくも素敵な肛門を拝めて、じつにラッキー！」

モニターで拡大肛門を観賞している観客からも、ほう、と多数の感嘆の声が洩れた。

茉奈自身が見せられているのと同じ映像が、一億人以上の目を楽ませている。

茉奈は頬を赤くして、手足をスライムから引き抜こうともがいた。しかし映像の尻が上下左右に躍るばかりで、ぬめる拘束から脱出できない。

「茉奈選手がわざわざ牝豹めひょうのポーズを披露してくれているおかげで、今回はお尻の穴をテレビに大公開できるんですよ！ 茉奈選手のサービス精神に拍手！」

司会者に煽られて、観覧席から盛大な拍手の音が湧き上がった。

「ううう……」

茉奈は羞恥をいつそうかきたてられて、ついつい身をよじり、また尻を蠢かせてしまう。恥辱の業火で身も心も熱く燃やされながら、恐ろしい予感さしなに苛まれた。

（見られるだけで済むはずがない。わたしを四つん這いにしたのは、もしかして……）

スライムの水面が再び波打って、二本目の柱がそそり立ち、茉奈の尻の谷間に向けて伸びてくる。

茉奈の不安通りに、肛門にスライム柱の先端が押しつけられた。

「はううっ！」

肛門を舐められる。椅子の触手が舌と化して女性器を舐めたように、スライムも舌に変じて肛門を舐めてくる。

「あひっ、あいいいいい！」

ニチュツ！ レルロロ！ ネットチャルルルウ！ チャプルルルツツ！

触手の舌とはまた異なるねっとりしてプニプニした感触が、何度も何度も細密な皺のすぼまりの上を這いまわる光景が、茉奈の目の前のモニターでくり広げられた。

映像は大接写になり、肛門の皺の一本一本がスライムの舌にかき乱される姿を、鮮明に見せつけられる。

カメラが切り替わり、尻全体が映った。谷間に潜りこんだスライムに操られるように、尻が上下左右に弾み、円を描くようにくねって躍る。

「はうっ！ あん、あふああああ！」

茉奈も知識として、肛門を愛撫する性技があることはわかっていた。同意のうえであれば、肛門を舐めるのも、舐められるのも、立派な性行為のひとつだと、頭では考えてきた。

しかし実際に自分が体験して、排泄のための器官がこれほど鋭敏に感じやすいことが、ショックだった。

（気持ちいい！ お尻の穴を舐められているだけなのに、どうしてこんなに気持ちよくなるの!?)

尻をカメラの前で振りたてながら、茉奈は懸命に言い訳をひねり出した。

（あああ、スライムも媚薬を出して、お尻をおかしくしてる。媚薬でなかったら、いきな

りお尻の穴をいじられて気持ちいいはずがない！

脳内で自身の尻を弁護している間にも、スライムに舐め責められている肛門は、どんどん感覚がよくなる。官能を深くしていく。

「はっんあああ！ お尻が、わたしのお尻があ……」

「おおっと！ 茉奈選手はお尻の穴が気持ちいい、と言うんですね！」

ミスター・ラッキーがスライムプールにズブズブと入ってきて、金びかのマイクを茉奈の顔に突きつけた。

「違う！ 気持ちよくなかない！ ふおおう！ はあああああ！」

「そのよがり声は、気持ちよくなっている証拠でしょう！ テレビに出演している人は嘘を言っただけじゃないよ！ コンプライアンスに反しますからね！」

「気持ちよくなんか、はあっひいひいっ！」

尻から重い衝撃波がズンツと伝わってきた。背筋が上下に振動して、脳に到達する。

「ひいっおおおおう！ お尻がっ！ お尻がああっ！」

引きつる顔をモニターに向けると、スライム柱が肛門を強引に割って、中に先端を挿入しているのが見えた。

「いやああ！ お尻に入ってくる！ そんなのいやあああっ！」



（あああ、すべて媚薬のせいよ……）

スライムが媚薬を分泌しているのではなく、スライムそのものが媚薬成分を含む物質で作られていると感じた。どちらにしろ、茉奈には想像を超えた得体の知れないものだ。

優しい陵辱に尻が痺れて、透明なスライムを唾えた尻を、またカメラの前で振りたててしまう。

茉奈自身は尻の動きに変化はないと思っているが、ミスター・ラッキーに見抜かれた。

「茉奈選手の尻のダンスの曲調が、ここに来て大きく変わりましたよ！ これまでは拒否のダンスでしたが、今は歓迎のダンスです！ 確実にもっともっとスライムに尻の中へ入って欲しいと懇願するダンスですっ！」

「違う！ そんなことは望んでない！ あああ、つらいだけよ！」

抗議する間にも、尻のダンスは止まらない。止めようとしても、スライムが腸の中を前進するたびに、ビクンビクンッ！ と、尻が上下にはねる。太腿がガクガクと震える。

「あふっ、あはあああつ！ おふっ、ほおおおう！」

実際に腸のどのあたりまで入ったのかはわからないが、茉奈は尻だけでなく腹の中までスライムが充満していると感じた。このまま胃までせり上がってくると心配になったときに、スライムが前進を止めた。

アナルセックスの知識があっても、自分の不要物を体外へ出す器官に、異物が入ってくる光景を見るのは、天地がひっくり返る異常事態だ。

侵入する怪物を振りほどこうと、茉奈は力の限りに尻を振りまわした。しかし肛門に吸いついたスライムは、血を吸う蛭のごとくはずれない。逆にミチミチと狭いすぼまりを押し広げて、徐々に尻の中に侵入してくる。

「ひいいいっ！ 入ってくる！ お尻に入らないでえっ！ ダメええ！ やっあああああああッ！」

もうスライムの侵略を止めることは不可能だった。モニターに映るスライムの太さは男の親指ほどだが、体感では太い杭を尻に呑みこまされている気がしてならない。

それなのに苦痛は感じない。杭はとても柔らかい。尻の中で形を崩して、腸の内側の形状にぴったりと合わせて、奥へヌルヌルと進んでくる。

「はあう！ あっ、あふああああ……おかしい、くんくん、お尻が変になっちゃうう……」
触手の処女強奪の無理やりな突貫とは異なり、肛門を舐めるときと同じように、優しくゆったりと腸の奥へと染み渡ってくる。

はじめての挿入だというのに、尻が内側から蕩けるような不思議な心地よさが広がっていく。

「こっちのチンポも頼むぜ」

「俺のピストルも磨いてくれよ」

「オラ！ オラオラオラアッ！」

今まではただ亀頭を顔に押しつけているだけだったトカゲ、カラス、チビが、サデイスティックな語気で言い放ち、いつせいに腰を動かします。茉奈の顔の表面でトカゲの赤みがかつた亀頭とカラスの黒光りする亀頭が滑り、左右の鼻の穴に同時に鈴口が突っこまれました。鼻の穴がともに広げられ、小鼻の形が歪む。

「うくうっ！ むううんん……」

野呂の頭上のテレビ画面に、茉奈の不様な顔がアップにされた。口に黒い肉幹を啜えさせられ、二つの鼻の穴を色が異なる亀頭で押し広げられ、上向きにひしゃげている。凄惨でありながら、見る者の笑いを誘う変顔だ。学生時代にお笑い好きの友人に見せられたバラエティ番組のゲームで、女芸人が鼻の穴にフックをつけられてこんな顔をさせられていた記憶が、脳の片隅でちらついていた。

茉奈本人の目には、女の、いや人間の尊厳を失うみじめすぎる姿だった。立体映像のテレビ画面のひとつが位置や角度を変えて、わざわざ茉奈の視界に自分の姿が入るようにしてくる。

「うううう……くっぷ、んんん……」

野呂軍団には慣れた作業なのか、トカゲとカラスがタイミングを合わせて亀頭を引いた。解放された茉奈の鼻が元の整った形を回復する。しかしすぐにまたびったりと同じ動きで二つの亀頭が動き、左右の鼻の穴に男の肉が突っこまれ、小鼻が押し広げられ、鼻全体が上を向く。ミスター・ラッキーの映像がパチパチと拍手するのが聞こえた。

「野呂軍団名物ブタ鼻フェラができましたよ！ 皆さん、見られてとつてもラッキー！」
自分の情けない姿を笑いにされて、茉奈の全身に新たな怒りが煮えたぎった。スタジオでの輪姦はいやな経験だが、相手にした男たちは茉奈とセックスすることに夢中だった。野呂軍団は茉奈をみつともない見世物にして、視聴者の注目を浴びるのが目的だ。

（ちくしょうっ！ 絶対に許さない！）

胸の内で憤怒の言葉を吐く間にも、顔の表面で三本の男根が動きまわる。何度も亀頭に押されてブタ鼻にされた。チビも前にまわって、眉間に亀頭を押しつけられる。両頬に鈴口から分泌する先走りの体液をなすりつけられる。左右の耳孔を亀頭でほじくられて、はじめの耳障りな音を聞かされる。髪の毛の中を肉棒が虫のように這いまわり、髪型をグチャグチャに乱された。

茉奈はいちいち反応すると相手を悦ばせるだけだと考えて、意識して無表情になるよう

に努めた。その対応も慣れたプレイヤーには見抜かれていた。サメが茉奈の顔を見下ろして、甲高い笑い声をぶつけてくる。

「ヒヤハハハハハ！ 自分ではリアクションをしないと決めているつもりだろうが、オレのチンポを啜えたまま無表情なのはかなりの大マヌケだぜ！」

茉奈は無言を貫いた。

「……………」

「いいさ！ いよいよオレの精液を飲ませてやるぜ！」

口の中でじっとしていた肉棒が、再び暴れはじめた。食道にまで届くほどに亀頭が深く押しこまれ、喉の粘膜を叩かれる。

「おごぼおっ！」

茉奈が激しくえずいた途端に、喉の奥で精液が撃ち出された。

ビッ！ ビリュ！ ビュルビュルビュルッ！ 音色が脳に直接響く。

「うぶぶうっ！」

四日前に飲まされ、浴びせられたどの精液よりも濃厚でどろどろした粘液が、食道いっぱいにつまり、這うようにゆっくりと落ちていく。

「がふっ！」

たまらずむせ返って、茉奈の唇とサメの肉幹の狭間から白い汚泥をあふれさせた。

むせる茉奈の顔で、他の三人の男も射精をコントロールする訓練を積んでいるかのよう同時に精液を噴出した。トカゲの冷ややかな体液が、茉奈の鼻の穴に注入された。カラスの粘液が頬にぶちまけられる。チビの亀頭は額に密着して精子を吐き出し、とっさに閉じた左右のまぶたの上を流れる。

「うぶぶつ、ぐむんんん……」

鼻孔がつまって呼吸困難になった茉奈の口から、サメのペニスが引き抜かれた。

「ぷはああ！ げふっ！」

大きく息を吸って、精液で喉がつまり、一気に嘔吐した。

「うげええええええええええ」

顔中を精液まみれにして精液のゲロを吐く茉奈の姿をながめて、四人の男がゲラゲラと大笑いする。

茉奈は濡れた犬のように懸命に首を振って、顔から精液を半分ほど飛ばした。回復した視界に、大量の射精を終えた男たちの四本のペニスガ力を失っていく姿が入った。

するとチビがそくさと走って、壁際に立つロッカーの扉を開けた。中にはいくつもの棚があり、そのひとつに目薬を思わせるサイズのプラスチックの容器がたくさん並んでい

る。チビが四個の容器を持って、仲間のもとへ戻り、一個ずつ手渡した。

四人はそろって右手の人差し指と親指で小さな容器の蓋の上と底をつまんで、ドローンへ向かって差し出した。透明な容器には毒々しい赤い液体が入っていて、表面に白い文字で『精力超増幅ドリンク 大爆発野郎』と記してある。

ドローンのひとつが元氣澁刺はつらつな雰囲氣の音楽を流し、ミスター・ラッキーの映像がいつもと違う真面目な口調でしゃべりだした。

「大脱走ゲームのスポンサーである剛直製薬株式会社じうちやくのベストセラー商品の「大爆発野郎です！」

四人の頭上に、何倍にも拡大した大爆発野郎の立体映像が浮かんだ。

「これを一瓶飲むだけで、何時間も勃起しっぱなし！ 何発でも射精できます！ テレビの前の皆様も快適にして豪快なセックスライフのお供にぜひどうぞ！ ただし一度に大量に飲むと、力がつきすぎてあなたのお相手が危険になります！」

ミスター・ラッキーのとなりに、CGらしいスーツにネクタイ着用の美青年が出現した。両手を二人の美女の腰にまわして、爽やかに笑っている。

美青年が片手に複数の大爆発野郎の容器を握り、中の赤い液体を一気にラッパ飲みした。途端に美青年のスーツとシャツとズボンが粉々に吹き飛ぶ。ネクタイとトランクスだけ

を身につけた怪物的マツチヨに変貌して、左右の手に二人の美女の足首を握り、ブンブンと振りまわして硬い床に叩きつけたところでCGが消えた。

「このような事態になるので、絶対に避けてください！ なおこの映像はCM上の演出ですよ！ ピンポーン！」

ミスター・ラッキーの言葉が終わるや否や、サメたち四人が同時に容器の蓋をキュッとはずして口に咥えると、左手を腰に当てて、身体をそらして、一気に飲み干した。

「プハ————ッ！」

と、全員一致でジョッキのビールを飲み干したように豪快に息を吐く。

「来た来た来た————あっ！」

サメが代表して吠え、四人のうなだれかけていたペニスが一気にそそり勃った。太さもひとまわり増大したように見える。

「さて、次は亜希子警視殿に楽しんでもらうぜ」

サメたち四人が亜希子のまわりに移動して、今度はトカゲがいきなりたぎり勃った肉棒を口に突っこんだ。

「おぶっ！」

亜希子をかこむ男たちの背中越しに苦しげなうめき声が、茉奈の耳に入った。直接見る

ことはできないが、野呂の頭上のテレビ映像に、亜希子の口に太く赤い肉幹が潜りこんでいる凄惨なアップが映し出されている。押し広げられた唇を巻きこんで、牡肉の凶器が前後に動くさまもおぞましい。

（わたしも、あれをやられたんだ……）

自分がやられている屈辱よりも、同じことを相棒がされている姿を見るほうがきつい。亜希子の両頬にサメとカラスのともに黒い男根が押し当てられ、茉奈がされたのと同じに亀頭で鼻の穴を広げられる。

「今やクールビューティーぶりで大人気の亜希子選手が、魅惑のブタ鼻を初公開です！ラッキ——ッ！」

亜希子の鼻が二度三度と亀頭で突かれて、全国の視聴者へ向かって不様な変顔を強制される。そのたびにサメ、トカゲ、カラス、チビが荒々しく笑い、ミスター・ラッキーが陽気にはしゃぐ。

「ひど」

酷い、と茉奈は叫びかけた。だが空中のテレビ映像の中で、亜希子の険しい瞳が『黙っている』と伝えてくる。

（亜希子さんにも言っただけじゃなかった。沈黙こそが亜希子さんの思いやりなのね）

茉奈も覚悟を決めて、亜希子の姿を見つめつづける。

亜希子を散々笑いだした後に、トカゲが再び口に入れたペニスを起動させた。外から見るとトカゲの突きに合わせて、亜希子の顔がガクガクと揺さぶられている。さらに三本のペニスが、クールを保つ美貌の上を這いずりまわった。

婦警を罵る男たちの顔に、凶悪な笑みがあふれた。茉奈にもピンと来る。

(あああ、もうすぐ出されてしまう……)

直後にトカゲが背中をブルツと震わせた。亜希子の喉が激しく蠢く。

「ごっぶぶうッ！」

苦痛のうめきとともに、肉幹を呑む唇から逆流した白い吐瀉物としゃぶつがドブドブとあふれ出た。ワntenポ遅れて、三つの亀頭から白い粘液が噴出して、亜希子の苦痛と怒りの表情にネトネトと被っていく。精力増幅ドリンクを飲んだためか、茉奈は自分が浴びたときよりも何倍も量が多く、粘度も高く感じた。

亜希子の口から引き抜かれたトカゲの亀頭が、とどめとばかりに精液を亜希子の鼻と唇にぶっかける。警察の女暗殺者の美貌が汚れた白に塗りつぶされてしまった。

男たちが離れると、即座に亜希子が力強く顔を振り、ほとんどの精液を飛び散らせた。現れた顔にはまだ白い染みが付着しているが、誇り高い冷徹さはなにも変わっていない。



精液に汚されたためにかえって亜希子の魅力を増したようにも感じて、茉奈は首を曲げて見つめていると、顔に冷水をぶっかけられた。

「わぶっ！」

チビが手に鉄格子の外へと伸びるゴムホースを持ち、指で先端をつぶして勢いをつけた水をかけてくる。となりで亜希子も水で残った精液を洗い流されていた。

ミスター・ラッキーの映像が解説を加える。

「今回の大脱走ゲーム前のネット投票の結果、『女性プレイヤーの顔に精液がついたままがいい』よりも、『顔をきれいにしたほうがいい』の投票数が上まりました！ なので今回は茉奈選手と亜希子選手の顔を洗っていますよ！」

二人とも濡れた顔をタオルで無造作にゴシゴシとふかれた。驚いたことに手ひどいあつかいを受けたのに、テレビ映像に映る茉奈と亜希子の顔からはメイクが落ちていない。

「はい！ 今回の女性プレイヤーのメイクは、当番組スポンサーの……」

と、ミスター・ラッキーが化粧品の名前を並べ、画面の拘束された二人の顔のまわりに商品の映像が次々と現れて消えた。

「生CMも終わったところで、いよいよ本番と行くか。チビ、用意しろ」

野呂の言葉に、チビがまたロッカーを開ける。別の棚から怪しい物を出して、サメたち

に渡した。

「真面目な婦警さんでも、これがなんなのか、わかるだろう」

サメが両手に一個ずつ握ったものを、茉奈と亜希子の顔に突きつけた。

茉奈は実物を間近にするのははじめてだが、充分知っている。

亜希子も驚いていない。いつかは出てくるだろうと思っていたという表情だ。

サメが握っているものは、白い円筒から伸びる黒光りするペニスの模型。

「そうとも。見ての通りのバイブレーターだ。じつは二人ともこつそり愛用してたりしてな。でもなあ、このバイブはこの世界の特別製のさ」

サメが勝ち誇った笑顔で、左右の親指で同時にバイブのスイッチを押し上げる。ヴー
ン、ウィーンウィーンというおなじみの振動音が鳴り、黒いペニスの模造品がくねりだ
した。それも茉奈と亜希子が知っている動作だ。しかし。

「えっ！」

「なに？」

硬いプラスチックに見えた男根部分が柔軟にくねり、前後左右にうねうねとのたうちな
がら長さを伸ばしていく。その動きは蛇行でも、ウナギの泳ぎでもない。背骨など存在し
ない、もっと自由自在なうねり。茉奈は思いついた言葉を口に出した。

「触手！」

「正解だ。こいつは生きた触手バイブだぜ。商品名は『悦楽テンタクル』さ」

空中に未知の象形文字を記すようにうねりまわる二条の悦楽テンタクルの黒い表面に、豆のような粒がいくつも生えて、不規則な凹凸が並んだ。生理的嫌悪感を催させる豆の列の先から、透明な粘液がじくじくと染み出して、触手全体がヌルヌルと妖しい乱反射をする。

茉奈は触手が自分の身体に使われることを想像して、眉間に皺が寄ってしまふ。

「悦楽テンタクルだけじゃなく、こういうエロいおもちゃもあるぜ」

カラスも両の手のひらに乗せたものを、茉奈と亜希子に向かって差し出した。

二個の毒々しい真紅の円筒形のもの。サイズは普通のマグカップほど。今のところプラスチックに見える円筒の上部は、ゆるやかなドーム型にふくらんでいる。

バイブレーターと違って、茉奈と亜希子にも正体不明だ。

（いったい、なに？）

茉奈の胸の中の問いに答えるように、二つの赤い円筒の上部が蠢いた。ひとつのなめらかな塊に見えていたドーム部分がいくつにも分裂して、細い触手の束になってゆらゆらと揺らめきはじめる。

「イソギンチャクなの！」

茉奈がつい名前を口にした海棲動物にそっくりだが、本物のイソギンチャクは水中から出すと、触手を体内に収納して丸く縮こまる。目の前の赤いものは空気中で多数の触手を躍らせた。

カラスが偽イソギンチャクを乗せた両手をゆらゆらさせて、ニタニタ笑う。

「ご名答！ 茉奈巡査に十点、なんてな。こいつの商品名は『快感イソギンチャク』だつてよ。女をヒーヒーよがらせるすぐれもんだ」

両手の指が快感イソギンチャクの胴体をギュッと押すと、触手の動きが激しくなり、表面から黒い触手パイプと同じ透明な粘液をたつぷりと分泌させた。

またもやミスター・ラッキーがCMをはじめた。二つのスーパー淫具の提供は、大人のおもちゃのパイオニア、彼女も奥様も泣いて喜ぶ夜伽よとぎカンパニー。

「さあ、スポンサー様の期待に応えてやろうじゃないか」

「茉奈ちゃんも、亜希子ちゃんも、いっぱい感じて商品をアピールしろよ」

サメとカラス、トカゲとチビがそれぞれ左右に分かれて、婦警を拘束する壁の背後にまわる。茉奈と亜希子が反射的に背後へ顔を向けると、突然壁が透明になり、自分の下半身と四人の男の姿が見えた。電気を通すと透明になる素材があることは、茉奈もニュースで

見たことがあったが、実物をはじめてだ。

二つ並ぶ白いショーツの尻を出した下半身をながめて、にやつく男たちが口々に告げる。「こうやって壁から突き出したケツのながめは格別だな」

「茉奈は尻も太腿もムチムチしてそそるな」

「亜希子の尻の下の絶対領域も、チンポがギンギンになるぜ。とつくにギンギンだけどさ」
「どっちもたまらん！」

パシッ！

「ひっ！」

ペシッ！

「くっ！」

二つの打撃音が鳴り響き、二つの悲鳴があふれた。尻たぶを平手で叩かれた二つの下半身が、グンツとはねた。ウエストを壁に固定されていなかったら、もつと大きくジャンプしただろう。

「この！」

「ゴミカスが！」

茉奈と亜希子はこらえきれずに、そろって長い右脚を背後に蹴り上げる。だがこのプレ

イに慣れている男たちに巧みにかわされてしまった。

サメたちがまた笑いながら、おどけた身振りで尻を連打してくる。サメとカラスが異様な四個の淫具をチビに持たせると、トカゲも加わった合計六本の手が、二人の四つの尻たぶの上で悪意のタップダンスを披露した。

パシッ、ピシッ、バチンッ、ベチンッ、バタタタタタッ！

視聴者に聞かせることを意識したりズミカルな肉の打撃音が連続して、サメ、トカゲ、カラスが軽快に場所を入れ替えて、尻を叩きつづける。

茉奈と亜希子は不自由な姿勢のまま、下半身を大きく躍らされてしまう。

（痛っ！ 痛いつ！ お尻を叩かれるのって、こんな痛いのに！）

スパンキングというプレイがあることは、茉奈にも知識としてあった。あまり痛くないように加減して叩くものだと思っていたが、男たちの腕力は本気で痛めつけようとしている。今の茉奈には苦痛と屈辱しかない。直接の性行為ではないからこそ、自分の心も身体もより酷く貶められていると感じて、悔しくてたまらない。

左に目を向けると、亜希子の顔が見える。自分の尻をおもちゃにしている男たちをにらみつける表情は、怒りよりも冷酷な殺意を感じさせた。国家公認の暗殺者が標的に狙いをつける顔だ。

だが、亜希子の顔を覆う冷酷の鎧が崩れた。

「あつ」

声を出す亜希子の尻から、白いショーツが一気にブーツの足首まで下ろされ、つま先から抜き取られる。皮を剥かれたフルーツのように白い尻肉が完全露出して、太腿の半ばまである漆黒のロングブーツと互いに魅力を強調し合う映像が、二人の前のテレビ画面にも大きく現れた。

フェラチオや顔面への射精をされたが、まだ一度も触れられていない亜希子の股間では、ふつくらした恥丘がぴつちりと閉じている。警察の暗殺者という、茉奈には想像もつかない任務が似つかわしくない清楚な風情をたたえた。

茉奈はすぐに自分もショーツを下ろされると覚悟したが、男たちの手が伸びてこない。

「女プレイヤーの恥態をひとりずつ見せるのが、視聴者に受けるコツなのさ」

サメがチビの手から快感イソギンチャクを取ると、粘液まみれの真紅の触手群を揺らす上部を亜希子の剥き出しの、しかし堅固に閉ざされたままの股間に押しつける。グチャア、という濡れた軟体音が、いきなりマイクのポリウムを上げたように留置場に響いた。

ついで亜希子が大きく口を開き、悲鳴に近い叫びをほとばしらせた。

「ああつ！ ふああああ、これは！」

サメが笑いながら快感イソギンチャクから手を放した。そのまま赤い生きた淫具が亜希子の股間に貼りついて落ちようとしめない。

「あおつ！ おふあああああ！」

壁から突き出た亜希子の上半体が波打つように上下にうねる。透明な壁の向こう側では、左右の太腿が強く閉じて、快感イソギンチャクを挟みつけた。軟体淫具が押しつぶされ、ジルクジルクと媚粘液を滴らせるが、まったく平気な様子で触手を蠢かせつづけている。

「浸みるう！ 身体に浸みてくるう！」

（亜希子さんがあんなに反応している！）

驚愕する茉奈の耳に、サメの笑い声が轟いた。

「ひやはははは。ビシバシ浸みこんでくるだろう。夜伽カンパニー自慢の最高級にしてリーズナブルなお買い求めやすい媚薬ローションさ！」

テレビ画面が左右に分割になり、亜希子の引きつる顔と、股間に快感イソギンチャクを貼りつけて痙攣する尻が並んだ。そこにピンク色のキャップをはめたファンシーな容器が重なる。容器の飾り文字が『夜伽ミラクルドリームローション』と読めた。

「次は茉奈に味わわせてやるぞ」

茉奈の尻に指が当たり、ショーツが奪われた。尻の肌が直接空気に触れ、ドローンのカ

メラに撮影される。茉奈の前に浮かぶテレビ映像に、自身の裸の下半身が克明に映っている。後ろへ首を曲げれば、透明な壁の向こうに剥かれた尻をながめる男たちが見えた。

四日ぶりに日本全国に放送されている茉奈の恥丘も、亜希子と同じく強固に閉じて、内側の婦人警官の機密を護っている。

そして自分の尻に、サメの手にあるもうひとつの快感イソギンチャクが迫るグロテスクな光景。すぐそばから聞こえる亜希子のうめき声と、どうしても視界に入る身悶えが、茉奈の恐怖を煽りたてる。

グチュグチュアア。

一段と大きく、閉じた恥丘に快感イソギンチャクが押し当てられる音色が鳴った。普段は他人に触らせることのない部分の肌の上で、細い触手の群れが縦横無尽にうねくる感覚が、気が狂いそうなほど不気味で、警官の矜持きょうじも忘れて叫んでしまう。

「ひっいいいいッッ！ 気持ち悪いいいっ！ いやあああっつ！ あうっ！」

触手の感触とは別に、チリチリッとした感覚が恥丘に突き刺さった。生け花に使う剣山を、恥丘だけでなく左右の太腿や肛門の周囲に軽く当てられたようだ。

針のような感覚が表皮から皮膚の内側へ浸透するとともに、鋭さが溶けていく。凍った蜂蜜で作った針が熱せられて濃厚な粘液になったように、太腿の中に、尻の中に、なによ

り恥丘の奥に、浸みこんでくる。亜希子が『浸みる!』と叫んだ理由が、茉奈にもよくわかった。そして茉奈も叫ばずにはいられない。

「浸みるう! わたしに浸みてくるう!」

媚葉が恥丘の外側だけでなく、内部に隠されているところにまで浸透してきた。普段は茉奈自身が意識することのない肉壁やクリトリス、さらにもっと奥の粘膜が熱くなり、体内で特別の存在だと主張する。まるで心臓の代わりに女性器が激しく鼓動を打ちはじめたようだ。

媚葉に侵され、異常を訴える恥丘の縦溝が、イソギンチャクの細い触手の束で強引に押し広げられた。熱く敏感になった粘膜が、異物に侵入される衝撃を、茉奈に向かって爆発的に伝えてくる。

「あひっ、ひああああつ! 入ってくる! イソギンチャクが中に入ってくるうう! ひいっ!」

何本もの触手に、蕩けるように痺れた肉壁をなでられた。それだけで凄まじい快感の電撃が全身を駆けめぐる。

「あおうっ! はひいっ! こんなのは!」

肉芽に触手が巻きついた。それだけで悦楽の炎が噴き上がる。

「ひきいっ！」

鋭敏な神経の凝集体を、さらにきつく締めつけられる。普通なら激痛が走るような力で陰核をくびられ、押しつぶされていくのに、灼熱の甘美が身体中に蓄積する。たちまち満杯になり、全身からマグマのごとくあふれ出した。

「イクッ！」

あふれる快楽の溶岩とともに、言うつもりのない言葉が口からひとりで飛び散る。

「イツちゃう！ どうして、こんなに早くッ、イクッううううッ!!」

股間に真紅のイソギンチャクを貼りつけた尻が上下左右に痙攣するのをながめて、サメがゲラゲラと笑った。

「オレも本当は女をじっくりと焦らし責めにするのが好きなんだがな。そうも言ってもらえないのさ。ホラッ！」

震える茉奈の尻に、サメの平手が叩きつけられる。ピシャッ！ という打撃音が高らかに鳴り響いても、尻を打たれることに痛みはなく、熱い喜悦の噴火しか感じられない。

二度目の絶頂が暴走して、茉奈の尻から脊髄を貫き、脳を沸騰させた。

「はっひいひい！ またイツちゃふうううッ！ イクイクうう！」

茉奈は赤い手の跡をつけた尻を、高くはね上げる。壁の穴の縁がウエストにきつく喰い

こみ、それすらも快感になった。

「はおおおう！ いいっ！ 気持ちいいッ！」

「近ごろの視聴者はどうにも気が短くてな。媚薬で、女が素早く、何度も、イクのいいんだってよ」

サメの言葉に、ミスター・ラッキーがわざとらしい渋い顔を作った。

「おっと、視聴者の批判はご遠慮していただきたいですよ！ テレビの前の皆様が望んでいるのは、女性プレイヤーのエクスタシーですからね！」

「ああ、わかってるって。テレビの前の連中、よく見てろよ！」

パシッ！ ベシッ！ と、茉奈の尻が打ち鳴らされる。そのたびに茉奈の肉体に絶頂が刻みこまれる。

「ひきいっ!! イクッ!! イクイクイクイクイクッ!! イキすぎて死んじゃううう!!」

叫びつづける茉奈の左で、亜希子もカラスに尻を叩かれて、同じ言葉を吐きつづけていた。

「おおおああ、イクッ!! イッチャうう!! イクイクイクふうあああっ!!」

二人の前のテレビ画面では、壁から突き出た二つの女尻が平手打ちで赤く色づき、固定されたウエストの可動範囲の限界まで上下左右に振りたくられている。尻の下では太腿の

間に取りついた赤いイソギンチャクが、触手を女性器の中に潜りこませて、うねうねと蠢かせつづけた。

「はっひいいいいい！ イクううっ!!」

「イクッ！ あつくふううう!!」

亜希子の尻をもてあそぶカラスが、二人のわななく尻に向かって告げる。

「二人ともよがり狂ってるが、茉奈も亜希子もケツの穴が空いてるぜえ！ みんなもよく見えるだろう！」

視聴者を意識したカラスの台詞に合わせて、ドローンが降下して、二つの肛門を接写した。茉奈と亜希子の肉の蕾つぼみはイソギンチャクの赤い触手に縁どられ、透明な媚薬ローションにまみれて、意図しないで繊細な皺をキュッとすぼめてはゆるめる動きを繰り返している。

「媚薬に酔い痴れてる状態で、おまえらのエロいケツに悦楽テンタクルをぶちこんだらどうなるんだ？ ええ、おい、どうなるようになる！」

透明な壁の向こうからの返答はない。カラスが背後に手を伸ばすと、チビが黒光りする二本の触手パイプを手渡した。

「そーら！ 茉奈ちゃんのケツの穴にぶっこみだ！」

淫具が意思となんらかの感覚器官を持つ動物のように亀頭を先にして空中をくねり、茉奈の尻の谷間に触れた。クンクンと臭いを嗅ぐように、あるいは肌を舐めるように、黒い亀頭が谷間を下っていく。テレビに映るその姿は、触手というより巨大な蛭を思わせる。

「はっ！ ダメっ！」

茉奈は新たな尻への陵辱を察して、懸命に肛門括約筋に力をこめる。だが黒蛭亀頭が肛門に到達して、ノックするようにつつつかれると、すぼまる皺の中心がやすやすと広がってしまった。茉奈本人の意思をまったく無視した、媚薬に侵された肉体の反応だ。

「くうっ、ふあああ、いやあああっ！」

バイブの亀頭がヌルリと、肛門の内側に潜りこんだ。

「はっおう！」

茉奈は短いひと声を上げると沈黙した。釣り上げられた魚のように口をパクパクと開閉するばかりで、喉の奥から声が出てこない。反対に頭の中では息がつまるほどの快感を、言葉にして繰り返している。

（気持ちいいっ！ 気持ちいいっ！ お尻が気持ちいいのおおおうう！）

悦楽の衝撃でつまった気道がようやく通じて、肺からの空気が声帯を震わせると、茉奈はイソギンチャクに何度も言わされた単語をまた発した。

「イクツッ！ お尻がイクうううっ!!」

茉奈の肛門には、まだ悦楽テンタクルの亀頭部分だけしか入っていない。それなのに猛烈な肉悦の炎が尻の中に充満して、茉奈を絶頂へと打ち上げた。

「お尻、イツちゃうううツツ!!」

「尻が！ 尻が狂うううっ！ イクツッ!!」

茉奈の叫びに、亜希子の嬌声がユニゾンする。亜希子も肛門に黒い亀頭部分だけを入れて、全身を大きくくねらせた。

二人とも肉褻やクリトリスを責めるイソギンチャクの愉悦に、肛門を異物で埋められる妖しい快美が加わり、絶頂の波が次々とひっきりなしに押し寄せている。

「おおおう、イクふう!!」

「イクツんん!! あひいいい」

カラスが両手を二本の触手バィブから放した。解放された二つの淫具が大きくうねり、自ら肛門の中を進みだす。黒い触手がズルズルと尻の中に入るにつれて、茉奈と亜希子の肛門の縁や腸の粘膜が、不規則に生えた柔軟な粒々でブチブチと刺激される。

茉奈と亜希子のうねる尻からカラスとサメが離れて、ドローンが撮影する映像の外へ出ていった。

テレビには二人の女警察官だけが映る。

ひとりは上半身に紺色のスーツ。

ひとりは上半身にブルーの制服。両脚に漆黒のロングブーツ。

二人とも大きく広げられた肛門からは、黒いバイブが突き出て、ヴヴーンとうなりながら白い後端をうねうねとくねらせている。

二人の股間に貼りついた赤いイソギンチャクも、触手の群れを蠢かせて、ヌチャヌチャと粘つく音色を奏でて女性器を嬲りつづけている。

淫具が立てる音に、透明な壁の向こうからあがる快樂の渦に呑みこまれたよがり声と、連続する絶頂を訴える叫びが重なる。

「あっひいひいっ！ イクうう!! またイクッ!! ほっおおおお！ もっともっといッちやううッッ!!」

「またイカされる!! んんんんはあああっ！ イキたくないのに！ おひいひいっ！ イクッんんんん!!」

ミスター・ラッキーの立体映像が自分もカメラに撮られないように注意して、声だけを響かせた。

「事前に視聴者の皆様に大脱走ゲームで見たい映像のリクエストを募集したところ、女性

プレイヤーが他人に触れられずに、淫具に責められたまま放置される光景が見たい、というリクエストが予想以上に多かったので、実現させました！ テレビの前の皆様、楽しんでただけてますでしょうか！ ラッキ————ッ！」

飛びまわるドローンカメラの群れの前に放置されたまま、二人は何回イカされたのか。背後からサメとカラスの声が叩きつけられた。

「放置サービスはおしまいだ」

「普通のセックスシーンのはじまりだぜ」

茉奈の股間にサメの右手が潜りこみ、イソギンチャクをむしり取ろうとする。しかし巻きついた触手が女性器の中から離れようとせず、陰核や肉壁が引き伸ばされてちぎれそうになる。強烈な痛みともエクスタシーともつかない衝撃が、茉奈の全身を貫通して、黄色い悲鳴がほとばしった。

「ハキイイイイイイッ！」

「こいつは取るときに面倒なんだよなあ」

サメの指がイソギンチャクの胴体をまさぐると、執拗に女肉にしがみついていた触手がひとりで離れた。異様な淫具がなくなっても、茉奈の肉唇は大きく開いたままになり、潜りこんだドローンの撮影で、グチャグチャに乱れた女の秘部がテレビ画面いっぱいになり、

ップにされる。

画面に黒ずんだ亀頭がニュツと現れ、実物の何倍にも拡大された膣口に挿入される。肉幹が突進して、根もとまで一気に女の肉孔の中に埋まった。

結合したピンクの女性器と黒い男性器のドアップ映像を、茉奈の悦楽の悲鳴が彩る。

「おっひいいいいいいいつ！」

「ひやはははははは！」

サメの高笑いが結合場面に加わった。

「これが別の日本の女刑事のマンコか！ イソギンチャク相手にイキまくってたのに、しつかりと狭くて、ギュツときつくて気持ちいいぜ！ さすが四日前にゲームで処女を奪われたばかりのお堅い女巡査様の真面目マンコだ！」

さらにミスター・ラッキーの声が被さった。

「夜伽カンパニーの媚薬は女性だけに効果があります！ 男性にとつてはただのローションなので、安心してセックスしてください！」

ミスター・ラッキーの宣伝文句が終わる前に、サメが腰を引きはじめる。画面いっぱい愛液とローションでヌラヌラになった肉幹が姿を現す。膣口の縁がまくれて、肉褻がぶるぶるとわななく反応が生中継された。

亀頭を膣内に残して、ぬめつく肉幹がすべて外へ出ると、画面の外で派手な咆哮ほうこうが放たれて、また一気に男根が突き入れられる。茉奈の尻にサメの硬い腹筋が激突して、パンツッと大きな音が鳴る。合いの手のように茉奈は歓喜の叫びをあげた。

「はっひいひいッッ！」

「いいぞ、茉奈！ いい声だ！」

またサメの身体が往復して、パンツッ！ と肉が鳴り、茉奈が高い悲鳴をあげる。

「くおおうううッッ！」

「大東京テレビのゲームで異世界女を何人も犯したが、やっぱり女警官を強姦するのが一番だぜ！」

テレビ画面の映像が切り替わり、茉奈とサメの全身が映った。茉奈の尻の両脇をサメの左右の手がつかみ、猛々しいピストン運動を開始する。

「ひいひいッ！ あっおおお！ えぐられる！ 身体がえぐられちゃう！」

茉奈の尻に、サメの腹が何度も何度もぶつけられる。普通の後背位なら、責められる茉奈の全身が前に押し出される勢いだが、ウエストを壁の穴で固定されて移動できない。サメから加えられる力のベクトルが上へ向かい、茉奈の尻がグイッと押し上げられた。肉を打ちつけ合う音と、自身のよがり声をBGMにして、下半身が激しく上下動を繰り返す。

「すごい！ 違う！ 前と違ふうう！ おおおおあああつ！」

四日前に茉奈を輪姦した男たちは、テレビ局の観覧席にいた。少なくともこの世界ではカタギだ。サメはあきらかに違う。女を暴力的に犯すことを喜びとする悪党の本領を發揮して、茉奈を責めたてる。

しかも躍る尻の中では、肛門に深々と潜りこんだ触手バイブがのたうっている。上下に並ぶ女の肉孔を、生きた男根と人造の肉棒で休みなく玩弄され、快感が共鳴して何倍にも大きくなつていく。

「イクツ！」

茉奈は壁から突き出た上半身を上下に動かして叫んだ。ハードロックのヘッドバンギングさながらの激しさで振られる首から、絶頂の訴えが連続する。

「イクツ!! お尻も！ アソコも！ イカされちゃウツ!! イクイクイクイク

ツツ!!」

亜希子の尻から伸びる黒いバイブの柄を、カラスが握り締めた。ズチュツ！ と濡れた音を立ててバイブが一気に引き抜かれる。

「ひっ！」

亜希子は強烈な刺激を受けた尻を振りたくって、透明な壁の向こうからカラスをにらん

だ。本人の意思とは関わりなく肛門が抜かれたバイブの形に開いたままの姿を、ドローンが接写する。

亜希子の前のテレビ画面いっぱい、大きく広がった肛門が映された。尻の中は暗がりになって、ピンクの腸の粘膜がチラチラと覗ける。肉孔の周囲をかこむ精密な皺には、股間にくつついたままのイソギンチャクの赤い触手が貼りついている。

「俺は好物を最初に食う性分なんだ。女は好物のアナルから食うぜ！」

カラスが自己紹介めいたことを告げたのも、視聴者へのアピールだろう。自分の言葉を証明するために、カラスがひざまずき、亜希子の開いた尻穴に口をつけた。舌を差し入れ、ピチャベチャとわざと大きな音を立てて、尻の中を舐めまわす。

「あひい！ はっあおおおおう！」

ついさつきまで腸の奥に収まっていた触手バイブに比べれば、ほんの入口を触れられているだけなのに、亜希子はおどましくも深い快感を覚えた。バイブにはない体温と緻密な動きで、的確に尻責めの悦びを掘り起こされる。

カラスが白目の無い眼球をぎらつかせて、今までとは違う作った笑い声をあげた。ニツクネームにふさわしいカラスの鳴き声じみた響きだ。

「クワツカカカカカカ。美味しいケツだぜ。亜希子ちゃんは警察のヒットマンだと聞いたが、

やっぱりターゲットに近づくために肉体を使ってるのかあ？ 巨乳やオマンコだけじゃなくて、ケツの穴も掘らせて仕事をしてやがんだろ」

亜希子は唇を堅く結んで答えない。だが肛門の縁をゾロリと舐めまわされると、高い声をあふれさせてしまう。

「きゃううっ！ くおっんんんん！」

「さあ、女刑事^デの使いこまれたケツに、俺のデカいのをご馳走してやるぜ！」

「おおーっ！ カラス選手お得意の挿入前のダジャレが出たーっ！ ラッキー！」

ミスター・ラッキーの言葉は、亜希子の耳には入らない。意識はすべて、肛門に入ってくるカラスの男根に集中している。目の前のテレビ画面には、拡大されて人間の頭がすっぽり入りそうに広がった肛門に迫る巨大亀頭が映っている。

「入ってくる！ ああああ、男の汚いモノが、自分の中に入ってくるう！ いやあああああああッ！」

拒否の叫びの語尾がどろりと蕩けていた。カラスにも、他の男たちにも、日本中の視聴者にも、そして亜希子自身の耳にも、歓喜の声として響く。

一度、自分の肉体が悦んでいると知ってしまったえば、もう耐えることはできない。亜希子の尻にカラスの腹がぶつかり、肛門の中に勃起ペニスが根もとまで埋もれる。最初の一撃



で、快感が大洪水となって荒れ狂った。

「イクっんんん!! 男にイカされるう!! いやっ、イックおおおおおッ!!」

アナルのエクスタシーに溺れる亜希子の尻肉に、カラスの鉤爪のような十本の指が喰いこむ。肉を引きちぎりそうな握力で固定された尻に、バstabバstabと腹が叩きつけられる。カラスの漆黒の目がギョロギョロと左右別々に動いた。

「クワッカカカカカ! いいケツだ! これから何度でもゲームでケツを掘ってやるぜ! クワッカカカカカアア!」

亜希子も壁の穴にウエストを捕らえられて、標本のように動けない。右隣でサメに犯される茉奈と同じに、尻を上方へガンガン突き上げられる。カラスが腰を引くと尻がガクンと下がり、またグイッと押し上げられる運動がつづく。

茉奈と亜希子は二人そろって、同じ動きを強制されつづけ、絶頂を重ねていく。

茉奈は男根で膣を貫かれながら、肛門を漆黒の触手バイブで責めたてられている。

亜希子は肉棒で尻を掘られつつ、イソギンチャクの真紅の触手でクリトリスをしごかれ、膣口を嬲られる。

「はひひひ!! イク!! イクのっおお!! アソコもお尻もイッチャウッ!!」

「ほっおおう! アナルもヴァギナもイクイクイクッ!! イクっふうふうッ!!」

壁の向こうから響く婦警の叫びに、サメとカラスががなり散らした。

「茉奈、喜べ！ 茉奈のマンコに、サメ様の精液をたっぷりそそぎこんでやるからな！
ぎゃははははははあ！」

「クワツカカカカカ！ 亜希子ちゃんのケツにカラス様が射精してやる！ 胃の中まで
いっぱいになるぜ！ カーカカカカカ！」

同時に茉奈と亜希子の体内深くで、大量の精液がぶちまけられた。熱い奔流が膣と腸の
中へどろどろと進んでいく。

「熱いつ！ 精液が熱くて、ひああああ、イックふうふうううッッ!!」

「きひいいいい！ 精液が沁みるう！ はっおおお！ イクううううッッ!!」
ズズッ！ ジュブッ！ と、二人から男根が抜かれる。

すぐさま茉奈の尻からトカゲの手で触手バイブが引き抜かれ、空いた肛門にトカゲの赤
い勃起が押しこまれる。膣には触手バイブが刺し入れられた。

亜希子の股間からも、チビがイソギンチャクを奪い、肉棒を叩きこむ。尻の谷間にはイ
ソギンチャクが貼りつけられ、肛門の奥に赤い触手の束がうねうねと潜入していく。

場所を交換した生きたペニスと淫具に陵辱を引き継がれて、茉奈と亜希子は艶めかしい
悲鳴を発しつつつけた。

「あはああああつ！ イクツ！！ アソコもお尻も全部イツちやうううんん！！
イクイクイクツ！！ ひいいいいい！ 壊れるううううツ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【電子版】
季刊配信
3-6-9-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
奇数月は奇数月
発売!



2次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC
**UNコミック
アンリアル**

**敗北乙女
エクスタシー**

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

新刊 姫騎士

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アークターシノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル



二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫